

ちがうって・・・いいね!～アフリカ・ザンビアと日本・沖縄～

実践場所: 沖縄県浦添市当山小学校

時間数: 13時間

実践者: 山里 拓哉

担当教科: 全教科

対象: 小学3年生

実践教科: 道徳・総合な学習の時間・特別活動等

- 1. ねらい**
- ・世界の国々の人々や文化に関心をもつとともに、文化の違いを理解し、自国や外国の文化を尊重する態度を育てる。
 - ・アフリカにおける課題について考えることで、よりよい自己の生き方について考える。

2. 実践内容

回	プログラム	備考
1-3	<p>「世界を身近に～国旗かるた～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界には国がいくつあるか予想させ、知っている世界の国々の名前を挙げる。知っていることと知らないことに気づく。 ・各国の国旗とその意味や言葉等を調べ、を作る。 ・国旗かるたで遊び、外国について関心をもつ。 	<p>世界地図</p> <p>インターネット</p>
4-6	<p>「ザンビアを知ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アフリカのイメージやザンビアグッズで思いついたことを話し合う。 ・世界地図を見ながら、沖縄とザンビアの地理的な違いを知る。 ・「ザンビアクイズ」でザンビアと日本の共通点や相違点を知る。 ・ザンビアグッズでモノランゲージ行う。 	<p>PowerPoint資料</p> <p>世界地図</p> <p>フォトランゲージ</p> <p>ザンビアグッズ</p>
7	<p>「エイズを正しくこわがろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エイズ患者の手記を読む。 ・エイズ, HIVについて正しく理解する。 ・ザンビアにおけるエイズとの関わりについて知る。エイズと自分たちの生活のあり方について考える。 	<p>PowerPoint資料</p>
8	<p>「だって、みんな人間だもの。～ネルソン・マンデラ氏～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フォトランゲージ「ネルソン・マンデラ氏」 ・人種問題の過去とネルソン・マンデラ氏の功績を知り、人権を尊重する態度を養う。 	<p>フォトランゲージ</p> <p>PowerPoint資料</p>
9-11	<p>「手食(てしょく)ってなあに？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像「手食する人々」を見て感想を話し合う。 ・『バングラディッシュから来たシャボン君』を読み、手食文化について考える。手食について理解する。 ・給食の時間で「手食体験」を行い、手食文化を理解する。 	<p>道徳・読み物資料</p> <p>自作資料</p> <p>学校給食</p>
12-13	<p>「チガウノハアタリマエ～バーンガ体験～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「バーンガ」体験を通して、文化の多様性を尊重し、積極的に共生しようとする態度を養う。 	<p>シミュレーション</p>

3. 成果 参加型の学習を取り入れ、書いたり、話し合ったりする活動を行うことで、日本と世界の人々や文化の違いに違和感を覚えていた児童が、違うことが面白いと感じ、他国の文化をより探求したいという思いをもつことができた。また、自国の文化のよさに気づくことができた。

4. 課題 海外の人々や文化に直接触れる機会が少なく、アフリカ・ザンビアにおける課題を自分の生活との関わりで考えることが難しかった。身近な問題として考えられる実践が必要である。

[授業実践の詳細]

1～3時限目：「世界を身近に～国旗かるた～」

この時限のねらい▶▶▶「世界」について漠然としたイメージをもっている児童が、世界には日本と同じような「国」がたくさんあり、それぞれの言葉や文化があることに気づかせ、世界の国々に関心をもつことができるようにする。

1. 子どもの活動の流れ

1. いくつ知ってる？世界の国々・・・世界で知っている国を挙げ、世界にある国の多さに気づく。
2. お気に入りの国・・・知っている国(先の活動で挙げられた国)の中から、児童それぞれ、別々の国を選び、インターネット等を使って、その国の国旗や国旗の意味、現地のあいさつ等を調べた。国旗を取り札に、その国の情報を読み札にして、かるた形式でまとめた。
3. 国旗カルタ・・・作ったカルタで遊び、世界の国々について関心をもてるようにした。また、世界地図を教室に掲示し、地理的にも理解できるようにした。



知っている国を挙げ合う様子

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 学級全体で76の国と地域を挙げる事ができた。世界には200近い国があることにとても驚いていた。
- ◇ 調べたことをかるたにまとめることで、他の児童が調べたことに興味をもつことができ、いろいろな国について知ることができた。
- ◇ 本やテレビなどで出てきた国がどこにあるのか進んで、地図を見て調べる児童が増えた。



国の場所を確認する様子



児童の挙げた76の「知っている国」

4～6時限目：「ザンビアを知ろう」

この時限のねらい▶▶▶ザンビアの学校や生活を知り、日本との共通点や相違点を考え、ザンビアの人々や文化に関心をもつことができる。

1. 子どもの活動の流れ


1. 「アフリカ・ザンビア」のイメージ・・・アフリカのイメージやザンビアグッズ(ザンビアで収集したもの)を見て思いつくことをブレインストーミング形式で挙げる。
2. ザンビアってどんなところ?・・・世界地図を使ってザンビアの位置を確認し、地理的にどんな国かを考える。
3. ザンビアクイズ・・・ザンビアについてのフォトランゲージやスライド、クイズを通して、ザンビアの学校や人々の生活の様子を知る。
4. ザンビアグッズでモノランゲージ・・・ザンビアで集めたグッズを見て触れることで、ザンビアに関心をもつことができる。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 児童のアフリカ・ザンビアのイメージは、「野生動物」と「広大な大地」等、雄大な自然に関するものと「貧しい」「熱くて大変」「怖い」といったネガティブなものがほとんどであった。児童はアフリカの人や文化に触れる機会はこれまでになく、テレビなどで見聞きしているものが大きく影響しているものと考えられる。
- ◇ ザンビアのイメージから児童はいろいろと想像し、興味をもってスライドショーを見たり、ザンビアクイズに参加したりしていた。異国の人々や生活、文化に触れ、「手で食事をすること」や「学校で制服を着ること」「教科書は買わないといけないこと」など、自分たちの生活との違いに驚いていた。
- ◇ ザンビアグッズを実際に手に取り、質感やにおいなどで、ザンビアをより身近に感じているようであった。チテンゲ(主に女性が腰に巻く大きめの布)を着た子の中から「これなら、どんな体型の人にも使えるね」という声があり、日本の着物にもそのような特長があり、遠く離れた人々の生活の知恵の共通点に感心していた。

使用した教材

<教材1>
ザンビアグッズ



黒人人形

<教材2>
フォトランゲージ




この子たちは何を
しているでしょう。

<教材3>
ザンビアスライド&クイズ
(自作資料)

★ザンビアクイズ★

ザンビアでは
手で食べる!



ここはどこ?
これなんだ?

7 時限目：「エイズを正しくこわがろう」

この時限のねらい▶▶▶エイズについて正しい知識を身につけるとともに、ザンビアの抱えるエイズの問題に触れることで、国際的な問題であることを理解できるようにする。

1. 子どもの活動の流れ

1. エイズ患者の手記・・・エイズで悲しい思いをした人の気持ちに触れる。
2. エイズ・HIVという病気・・・エイズ・HIVがどのような病気なのかを知る。感染経路を知る。
3. ザンビアとエイズ・・・ザンビアではエイズによって親を失う児童がたくさんいること、エイズに関する正しい理解を啓発する活動が多く行われていることを知り、患者や感染者に対する差別や偏見をなくそうとする態度を養う。



ザンビアの特別支援学校にあるエイズ感染を防ぐ取り組み。校内のあちらこちらにこのようなレッドリボンの表示がある。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ エイズという病気を初めて耳にする児童がおり、「不治の病」であることに驚いていた。
- ◇ 自分たちのあまり知らない病気で、ザンビアではこんなにもたくさんの親を失った児童がいることを聞くと、エイズという病気の恐ろしさをイメージできたようであった。学校や街中にエイズへの偏見をなくそうとする看板があることを知り、ザンビアではより身近で深刻な病気であることを理解していた。自分たちの街中にそのような表示や看板があるか探してみたいという児童の声があった。
- ◇ エイズに対して嫌悪感をもつ児童が多かったので、「日常生活では感染らないしなこと」と「血の取り扱いについて十分気をつければよいこと」を伝えた。



街中にあるエイズ検査を促す看板。

TERM	ORPHANS		VULNERABLES				
	LOST MOTHER	BOYS	LOST FATHER	LOST BOTH	GIRLS	BOYS	
1	2	2	11	7		2	
2	5	3	6	8		1	
3	5	5	14	13	2	1	
4	6	3	23	26	5	1	
5	12	6	24	17	2	2	
6	5	8	12	18	6	9	
7	7	11	28	21	7	10	
8	2	0	1	0	1	0	
9	0	1	3	6	3	1	
TOTAL	44	39	122	116	26	27	
GRAND TOTAL	374			BOYS	182	GIRLS	192

ザンビアの学校では、親のいない子がどの学年にどれくらいいるかを教師が把握できるように、表を作っている。

使用した教材

- <教材4>ライアン・ホワイトの手紙(インターネットより)
- <教材5>ザンビアで撮った写真のスライド(自作資料)

8 時 限 目：「だって、みんな人間だもの。～ネルソン・マンデラ氏～」

この時限のねらい▶▶▶黒人の受けてきた差別とそれを克服しようとした人たちの信念と努力を知り、他人種へ偏見をもたず、人類がみな平等に生きられるような社会をつくっていかうとする心情を育てる。

1. 子どもの活動の流れ

1. フォトランゲージ・・・フォトランゲージで「ネルソン・マンデラ氏死去」について考える。世界中の人が悲しみ、功績を称えている様子に触れる。哀悼の意を込めて踊る文化にも触れる。
2. 「黒人人形」振り返り・・・児童の初めて黒人の人形を見た時の感想(本実践4時限目)を振り返る。
3. ネルソン・マンデラ氏スライドショー・・・南アフリカの歴史とマンデラ氏の功績をスライドを通して知ること、黒人が受けてきた差別とそれを克服しようとする人たちの信念と努力を理解する。
4. 平等な社会に向けて・・・授業を受けて、考えたことや思ったこと、これからの生活で生かしたいことを感想に書いたり、話し合ったりする。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「黒人人形」を見て、「こわい」「きたない」「変」といったネガティブな意見が多く聞かれ、悪意はなくとも、見慣れていないものに対する否定的な考えがあることがわかった。
- ◇ 児童の感想からは、「どんな人種でも、能力に差があっても、みんな仲良く暮らしていきたいです」「自分たちの考えが全て良くて、当たり前だと思っていたけど、場所が変わればそうではないこともあるということがわかりました」という声が聞かれた。
- ◇ アパルトヘイトやネルソン・マンデラ氏の功績について知ること、児童は、自分たちの見方が差別的な偏見であったことに気付いていった。相手の立場に立って物事を考えることや自分の考えを広い視野で客観的に見ることを教育の場で教えていく必要があると感じた。

使用した教材

<教材6>
 フォトランゲージ(写真はインターネットより)

<教材7>
 アパルトヘイトとマンデラ氏についてのスライド(自作資料)

9～11時 限目：「手食(てしょく)ってなあに？」

この時限のねらい▶▶▶手食についての資料や手食体験を通して、他国の食文化を理解し、尊重しようとする心情を育てる。自分たちにとっては違和感のある文化でも、それぞれに合理性があり、文化に優劣はないことに気づかせる。

1. 子どもの活動の流れ

1. 手食ってどう思う？…手食をする人たちの映像を見て、自由に話し合う。
2. 読み物資料『バングラデシュから来たシャボン君』…手食文化をもつ人たちの気持ちを考え、異文化を理解し、受容しようとする態度を養う。
3. 手食ってなあに？…自作資料で、世界で一番多くの人が手食文化をもっていること、日本でも手食文化は残っていることなどについて知る。自分たちにとっては違和感のある文化でも、それぞれに合理性があり、優劣はないことに気づかせる。
4. 手食体験…保護者の理解を得て、学校給食で、手食体験をする。いろいろな手食の仕方を知る。手食をしながらかでも、マナーはあることを伝える。
5. 手食体験の感想共有…手食文化を知り、手食体験をした感想を道徳ノートに書いたり、話し合ったりする。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 手食をする人々の映像を見ての児童の主な感想は、「手が器用」「黒人ばかり」「レストランなのに手で食べていて変」「インドかアフリカだろう」「貧しい国なのかな」「マナーが悪いと怒られないかな」「食べ物は熱くないのかな」であった。違和感を覚えているようであった。
- ◇ 手食体験を通して、児童は「ビデオで見たように上手に食べられない」「家でもやってみたい」「日本の食べ方が私は好き」「箸やスプーンの便利さがわかった」という声が多く聞かれ、日本の食文化が自分たちには合っているということを再認識している様子であった。
- ◇ 「手食＝マナーがない」と考えている子もいたので、食べ散らかさないことや他の人に迷惑になるような食べ方をしないことを伝える必要があった。
- ◇ 保護者からは「自分たち大人も初めて知ったことや偏った見方で異文化を見ていたことに気づかされた」「貴重な体験ができ、とても良い試みだと思う」という意見が聞かれた。

使用した教材

<教材8>
「手食(てしょく)ってなあに？」(自作資料)

この自作資料は、手食の基本的な知識とマナーを学ぶための教材として作成された。内容は、手食の定義、世界での普及状況、手食の利点と注意点、手食のマナーなどが紹介されている。

<教材9>
映像「手食する人々」
(YouTube「インドの大衆食堂」より)

この映像は、インドの大衆食堂で手食をする人々の様子を写している。手食の文化やマナーについて学ぶことができる。

<教材10> 読み物資料「バングラデシュから来たシャボン君」(『4年生のどうとく』文溪堂)

12～13時限目：「チガウノハアタリマエ～バーンガ体験～」

この時限のねらい▶▶▶「バーンガ」(シュミレーションゲーム)で異文化のコミュニティに入った時や異文化をもつ人たちを受け容れる時に感じる難しさを体験することを通して、文化の多様性を理解し、積極的に共生しようとする心情と態度を育てる。

1. 子どもの活動の流れ

1. バーンガ・・・トランプを使った異文化体験ゲーム。
【ルール概要】ゲーム中、話してはいけず、身振りでコミュニケーションをとる。5～6名の国(グループ)に分かれ、それぞれのルールでゲームを行う。他の国では少しずつルールが違うことを当人たちは知らない。一定時間で勝ちの多い人は隣の国へ移る。
2. 振り返り・・・ルールの違うことに気づいた時、どのような気持ちになったか、自分はどのように対応したかを話し合う。異なる文化をもつ人々へ、または、異なる文化の国へ行ったときに、どのように関わればよいのかを道徳ノートに書いたり、話し合ったりする。



ルールの違いに戸惑う様子

使用した教材

<教材11> バーンガ

バーンガ

ルール

ぜったいにしやべてはいけない。(身ぶりはよい)

親はカードを同じ数ずつ配る。(1グループ5人のところは5枚・6人のところは4枚)
はじめの親はじゃんけんで決める。2回目より後は勝った人が親となる。
あまったカードは真ん中におく。
くぼったカードはほかの人には渡せない。

<ゲームスタート>

手持ちのカードはどのじゆん番でも出してよい。
えらんだ一まいのカードをつくえの上におく。全員がそろったら、めくる。一度出したらカードをかえてはいけない。

カードの強さは下の通り

強い ←	赤13	赤12	赤11	赤10	赤9	赤8	赤7	赤6	赤5	赤4	赤3	赤2	赤1	黒13	黒12	黒11	黒10	黒9	黒8	黒7	黒6	黒5	黒4	黒3	黒2	黒1	弱い →
------	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	------

出したカードのうち、一番強いカードを出した人が1ポイントゲット (じしゃくを1こする。)
使ったカードは真ん中を集める。
手持ちのカードを出し終わったら、すべてのカードをまぜ、親がくぼり直す。 ポイントはそのまま。
ゲーム時間は10分間

ゲームが終わったときに、ポイントの多い人が勝ち (同点の場合はじゃんけん)

A

1グループ5～6人
カードは計26枚
(赤いマークの13枚・黒いマークの13枚)

それでは レッツ・バーンガ!!

「カードの強さ」の部分グループ間で少しずつ変化させている。
<例>

- ・数字の低い方が強い
- ・黒のカードが強い
- ・何よりも強いジョーカーを入れるなど

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ルールの違う人が国に入ってきたら、どうしてルールをわかっていないのかとても苛立ちを覚えているようであった。中には、何も言えず、その国のルールに流されてしまう児童もいた。ルールの違うことにも気づかない児童もいた。
- ◇ 国語の時間で調べたことわざを使って「郷に入っては郷に従え」という言葉を持ち出して、別のグループの人でも、その国のルールでやるべきだと主張する児童もいた。
- ◇ 外国へ行ったり、違う文化をもった外国の人と過ごしたりした経験がないため、「自分が実際そのような場面になったら」というところまで想像するのは難しい様子であった。



身振り手振りで必死にルールを確認し合おうとしているがなかなか伝わらない・・・

3. 全体を通して

授業の様子



フォトランゲージでそれぞれ思ったことを書き入れる様子



グループ間で意見交流している様子



給食の時間に手食体験をしている様子

参考文献・資料

- 1) 日本国際飢餓対策機構編『世界と地球の困った現実』2003年, 明石書店(教材3)
- 2) 独立行政法人国際協力機構(JICA) HP「世界エイズデーによせて」2012年(教材5の補足資料)
- 3) Wikipedia「アパルトヘイト」「ネルソン・マンデラ」(教材7)
- 4) 岡田哲『食の文化を知る事典』1998年, 東京堂出版(教材8)
- 5) 日本手食協会(NHK:Nippon eat-by-Hand Kyokai) Facebook(教材8)

ザンビアを通してアフリカ州を理解する

実践場所: 沖縄県那覇市立首里中学校
 実践者: 喜納 多枝子
 対象: 中学1年生
 時間数: 6時間
 担当教科: 社会科
 実践教科: 社会科

1. ねらい アフリカの自然・歴史・産業などを大観し、ザンビアを通して具体的な理解を深める。さらに「発展途上国の現状」を理解し、日本が行っている援助活動を通して「国際協力」の必要性について考える。

2. 実践内容

回	プログラム	備考
1	「アフリカ州ってどんなところ?」 (事前の取り組み) ・アフリカ州に関するイメージや知っていることをあげてみよう。 ・ザンビア紹介(PPT) ・ザンビアの子供たちに自己紹介カードを書こう。	①PPT…前海外協力隊員戸倉さんよりご提供いただいた資料から抜粋
2	「アフリカ州の自然環境」 ・アフリカは「暑い」「乾燥している」というイメージが強いが、大陸の大部分は標高が高く、意外と涼しいことを理解する。 ・アフリカ大陸の自然環境を「雨季と乾季」・「野生動物」・「主食」と関連付けて考える。 ・シマ試食体験(給食時間)	②教科書P70～71
3	「アフリカの歩みと文化」 ・公用語や国境線からかつてのヨーロッパ諸国における植民地支配の歴史について理解する。 ・伝統的な言語や宗教および支配下時代の影響について知る。	③教科書P72～73
4	「植民地支配の歴史と産業のかかわり」 ・アフリカの産業が抱える問題点を植民地支配の歴史と関連付けて考える。	④教科書P74～75
5	「発展途上国の現状について考える」 ・発展途上国の現状を生活や学校の様子から考え、自分たちの暮らしと比較することで自分にできることは何かを考える。	⑤教科書P76 【フォトランゲージ】
6	「日本が行っている援助活動について理解する」 ・ザンビアで活躍する青年海外協力隊の活動を通して、遠いと感じた国々を身近に感じることができる。 ・かつての沖縄との類似性を紹介することで、発展途上国の人々にとって必要な支援について考える。	⑥教科書P76

3. 成果 ザンビアという国名さえ知らない生徒がほとんどであったが、今回の授業を通してアフリカ州の自然環境やこれまでの歴史、現在の人々の生活の様子への理解を深め、身近に感じられるようになったと思う。

また、生活の様子を対比することで自らの生活を振り返り、今自分にできることは何か考えることができた。

4. 課題 単元の学習が終了すると次の内容へ移行するために継続的な指導は難しい。

総合的な学習もテーマが決まっており、その時間を活用するのは困難であったので、教科の時間のみの実践となった。

5. 備考 教科書:「帝国書院 地理的分野」を使用

写真出典:山田實写真集『こどもたちのオキナワ 1955-1965』(池宮商会)

沖縄県立博物館内 展示写真

[授業実践の詳細]

1 時 限 目 : 「アフリカ州ってどんなところ？」

この時限の**ねらい**▶▶▶次時から学習する内容がアフリカ州であることから、テレビなどを通してアフリカについてどのようなイメージを持っているか確認する。またザンビアの子供たちへカードを作成することで身近に感じることができるだろう。

1. 子どもの活動の流れ

1. アフリカ州について知っていることをあげてみよう
2. ザンビア紹介(PP 1を見る)
3. ザンビアの子供たちへ自己紹介カードを送ろう

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ テレビや本などからいろいろな情報を得ている生徒もいれば、また一部の地域や人々の情報を全体像とらえていることもあった。

[生徒のアフリカ州に対するイメージ]

- ・砂漠がある
- ・自然がたくさん
- ・動物いっぱい
- ・サッカーがさかん
- ・いろいろな民族
- ・虫を食べている
- ・視力が5.0
- ・温暖なイメージ
- ・暑そう
- ・日本とのつながりがなさそう
- ・地域によって環境がちがっていそう
- ・工業があまり発達していなさそう
- ・毎朝遠くまで水をくんでいそう
- ・学校に通えない子どもがいる
- ・児童労働がある
- ・優しい人が多そう
- ・貧乏な人が多そう
- ・いろんなところで戦争をしていそう
- ・みんな裸足ってイメージ
- ・治安が悪そう
- ・餓死している人がいそう
- ・伝染病が流行っていそう

- ◇ 「ザンビア」という国名を初めて聞く生徒が大多数であったが、国の位置の確認やどのような生活をしているのだからかと想像することができた。

- ◇ 現地の生徒へ自己紹介カードを書くことで、親近感を持ってもらうことができた。



自己紹介カードを作成している生徒

使用した教材



<教材1>

前海外協力隊員戸倉さんよりご提供いただいた資料から抜粋し、作成したプレゼンテーション

ザンビア国は部族数が73あることや携帯電話普及率教育事情、気候、服装、など概要を捉えることができた。



2 時 限 目：「アフリカの自然環境」

この時限のねらい▶▶▶アフリカの自然環境の大まかなようすを、熱帯林や砂漠の広がり注目して見る。またザンビア研修の写真からサバナ気候の景色や雨季と乾季の違いについて理解する。

1. 子どもの活動の流れ

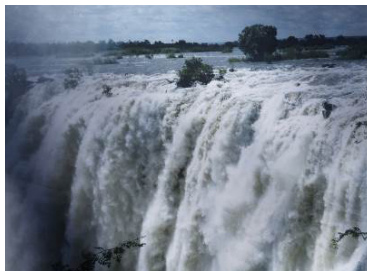
1. アフリカ州の気候の特徴について理解し、略地図で表現する
2. ザンビア研修の写真を紹介
3. シマ試食体験(給食時間)

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 雨季と乾季のビクトリアフォールズの水量の違いに驚きの声を上げる生徒もいた。気候の違いで主食も違うことから、地域によって主食が異なることに興味を示していた。
- ◇ シマ試食体験では、「意外とおいしい」「甘くない蒸しパンのようだ」「味がなくてまあまあいける」などといった感想が聞こえた。(以下生徒感想)
- ◇ アフリカといえば、動物と砂漠というイメージが強かったが、いろんなモノを生産していることや温帯があることもわかった。シマという食べ物に興味を持った。食べてみたい。
- ◇ アフリカには世界一の砂漠、川、そしてキリマンジャロ山があって、自然が豊かだすごいと思った。それにサバナや熱帯雨林には動物もたくさんいて、まさに自然の宝庫と思った。はじめて気づいたことは、アフリカは暑いイメージがあったけど、寒いところもあるということだ。アフリカにも色々な気候があるということがわかった。それに気候が違くと食べ物も変わっていて、アフリカに興味を持った。

使用した教材

<教材1> 雨季と乾季の違い、主食のシマ



<教材2> シマ試食体験



3 時限目：「アフリカの歩みと文化」

この時限のねらい▶▶▶公用語や国境線からかつてのヨーロッパ諸国における植民地支配の歴史について理解する。伝統的な言語や宗教が支配によってどのような影響を受けたか理解する。

1. 子どもの活動の流れ

1. アフリカ州の国々を使用されている公用語や宗教で分ける。
公用語・・・フランス語、英語、アラビア語など
宗教・・・キリスト教、イスラム教など
2. 国境線の特徴について考える。
3. 南アフリカ共和国の「アパルトヘイト」について考える。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 日常生活では現地語を使用しながら、学校の授業は英語で行われているという現状をよく理解できていない生徒もいた。ザンビアで使用している小学2年生の社会科(生活科のような)の教科書をみせると、中学1年生が使用している英語の教科書よりもはるかに難しい英語で説明がされているのを見て、とても驚いていた。
- ◇ 73の部族語が存在する国の中で、共通の言語の重要性を感じ取っている生徒もいた。
- ◇ 国立博物館の展示物や独立記念像から支配下における苦しみや怒りを感じていた。また南アフリカの apartheid について初めて知った生徒が多く、独立や差別に対する多くの戦いがあったことに関心を示していた。

使用した教材

<教材1> ヨーロッパ支配の影響(伝統的文化とヨーロッパ文化)



伝統的な太鼓とダンス



英語で行われる授業

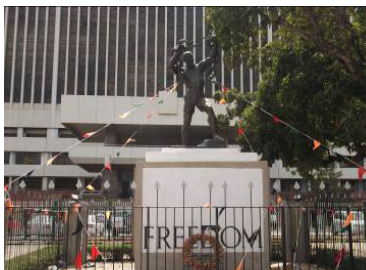


学校の壁に掲げられた十字架

<教材2> ザンビア国旗、独立記念像、南アの apartheid



国旗の色の意味は?



像に込められた思いとは?



どっちが有色人類用?

4 時限目：「植民地支配の歴史と産業のかかわり」

この時限のねらい▶▶▶アフリカの産業が抱える問題点を植民地支配の歴史と関連付けて考える

1. 子どもの活動の流れ

1. アフリカの主な鉱産資源の分布図を使用して、どの地域からどのような鉱産資源が採掘されるか理解する。(金・石油・銅・ダイヤモンド・レアメタルなど)
2. モノカルチャー経済の問題点について考える。

2. 子どもの活動の成果・反応

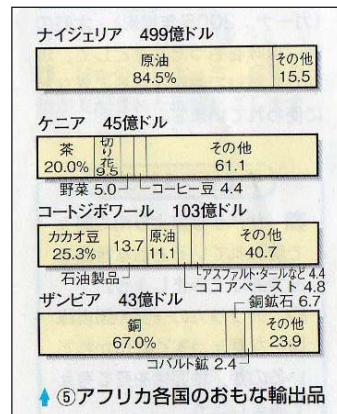
- ◇ どこどの国からどのような鉱産資源が産出されるか地図で確認することで、アフリカからダイヤモンドや金などの貴金属類や携帯電話などで使用されているレアメタルが産出されることを知り、驚いているようであった。
- ◇ アフリカ各国の主な輸出品グラフから、アフリカ各国の経済が特定の鉱産資源や農産物に支えられているモノカルチャー経済であることを知り、この経済の問題点と経済を安定させるためにどのような取り組みが必要か考えることができた。

使用した教材(教科書資料)

<教材1>
鉱産資源の分布図



<教材2>
アフリカ各国の主な輸出品グラフ



5 時限目：「発展途上国の現状について考える」

この時限のねらい▶▶▶発展途上国の現状を知り、日常生活や学校の様子を自分たちの生活と比較することで、自分たちの生活のあり方を考える。また、異文化を理解しながら問題点を解決する方法を考える。

1. 子どもの活動の流れ

1. 発展途上国について理解する。
2. 【フォトランゲージ】ザンビアの人々の生活の様子を考える。
3. モノの豊かさと心の豊かさについて考える。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 学校の様子や子供たちの生活の様子を考えることで、自分たちの日常生活とはかけ離れていることに気づいた。
- ◇ 弟妹をおぶったり、水をくみ行く経験のない生徒たちにとって、こんな暮らしは辛く苦しいものと考えている。しかし、ザンビアの子どもたちはなぜあんなに笑顔で楽しそうなのか、というところから幸せの価値観の違いに気づいたようである。(以下生徒感想)
- ◇ ザンビアと日本と豊かさには大きな違いがありますが、私はそう言うことを知らずに、欲しいものがある時はすぐに「買って」とお願いしていたことが恥ずかしくなりました。ザンビアの子どもたちは本当に勉強がやりたいというのが伝わるぐらい、みんな真剣な表情ですごいと感心しました。
- ◇ 1クラスあたりの生徒数の多いこと、制服を着ていない子がいることが気になり、印象に残りました。貧しくて苦しい生活を送っていても笑顔が絶えず、明るく前向きに生きていることも、すごく心を打たれました。日本は比較的、モノに恵まれていて困ることはあまりないけど、アフリカの国々に学ぶことはたくさんあると思います。私も困っている国に何ができるのかゆっくり考えて行動したいと思いました。
- ◇ フェアトレードマークの商品を買うことも支援の1つと知ったので、見つけたら買いたいと思いました。

使用した教材

<教材1> 私たちの様子(フォトランゲージ)

- ①点線部を隠された写真を各班に配布し、どのような場面が隠されているのか班で話し合う。(右・中の写真)
- ②班で話し合ったあと、点線部を見せる。さらに、子供の様子に注目させ気づいたことを述べさせる。
- ③もし自分が同じような生活をしているとしたらどのように感じるか考えさせる。
- ④「貧しすぎて彼らは不幸か?」ということを経験者の表情から考える。(右の写真)
- ⑤「不幸でなければそのままでもいいのか?」ということを考え、私たちにできる支援(日本が行っている支援)を考える。





<教材2> 学校の様子



①点線部を隠された写真を各班に配布し、
どのような場面が隠されているのか班で話し合う。

②班で話し合ったあと、点線部を見
せる。さらに、子供の様子に注目さ
せ気づいたことを述べさせる。

<教材3> 異文化理解

ザンビアでは食事は手でいただく。しかし、水道設備が整っていないため、水道の蛇口から水は出てこない。このような状態では大多数の国民はお腹をこわしてしまう。手で食べるという文化を否定せずにお腹をこわさない対策を考える。



シマを手で食べる様子



レストランなどに設置されたポリタンク

6 時限目：「日本が行っている援助活動について理解する」

この時限のねらい▶▶▶ザンビアで活躍する青年海外協力隊の活動を通して、国際貢献のあり方について考える。

またかつての沖縄との類似性に気づくことで、途上国の人びとの生活を他人事ではないと感じることができる

1. 子どもの活動の流れ

1. 日本はどのような方法で協力しているか考える。
2. 沖縄とザンビアは似ているところはないか考える。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ザンビアで活躍する日本人の写真を紹介すると「こんなにいるの?」という反応であった。沖縄県出身者がいて柔道やソウラン節など日本文化を教えていることに感銘を受けている生徒もいた。
- ◇ 終戦後の貧しくても心豊かだった沖縄の時代と重ね合わせることで、ザンビアの発展を願う生徒の感想が聞こえた。(以下生徒感想)
- ◇ 人間は同じ何だと感じました。カメラを向けられたら笑うし、妹や弟を何時間も抱っこやおんぶしているところは昔のウチ

ナーンチュと一緒にだということがわかりました。ザンビアはこれからも発展していくと思います。私にできることがあれば支援していきたいと思いました。

- ◇ ザンビアで活躍する日本人のとても感動しました。沖縄の文化であるエイサーをこれから教えようとしていることを聞いて、とても嬉しくなりました。また、ザンビアの人たちがとても輝いて見えたし、写真に写っている人たちはみんな笑顔で、私たちとは違う「幸せ」があふれ出ている、自分も幸せな気持ちになりました。また、そんなザンビアと似ている時代が沖縄にもあったことを知って親近感がわきました。
- ◇ ザンビアの学校や生活の様子をみて驚くことがたくさんありました。その中でも私が一番驚いたことは、海外で活躍している日本人についてです。私も将来、海外で発展途上国を支援したいと思っていたけど、こうやって実際に役に立っている人がいることに驚きました。しかも皆、病院の先生や学校の先生など大きな仕事をしています。すごかったです。

使用した教材

<教材1> ザンビアで活躍する海外協力隊員、日本のODAで建設される道路工事現場で働く人々



<教材2> ザンビアと沖縄の類似性



ザンビア

かつての沖縄

ザンビア

かつての沖縄

3. 全体を通して

授業の様子



左: 写真の周囲に気づいたことを話し合い、書き込んでいる様子。

右: 班の話し合いが終了したら黒板に掲示。それぞれの写真を「田舎」か「都市」かに分類しながら貼り付けていく。

参考文献・資料

- 1) 山田實写真集『こどもたちのオキナワ 1955-1965』(池宮商会)
- 2) 沖縄県立博物館内 展示写真